



恩納村農山漁村 生活研究会

元気の源は食にあり！沖縄を支えてきた美味しい調理法を未来へ

恩納村には15字あり、戦後は「生活改善グループ」という婦人を中心とした公衆衛生を学ぶ活動が各字に存在していた。食糧難時代には保存食の作り方や、地域の生活水準の向上へ向けて普及所からの指導も行われていたとい

う。その後、1974年に沖縄県の補助金にて活動拠点「恩納村婦人の家」が設置され、伝統的な味を継承していくことを目的に恩納村農山漁村生活研究会が発足。40代から90代の有志婦人会員による意欲的な活動が始まった。

ずっと語り継がれてきた、村独自の調理法



現在37名いる会員の中で最高齢者は90歳を超える。各々の身体状態や体力に合わせ、声かけしながらできる作業を分担し、活動参加している。行事での販売商品はモズクやアーサ天ぷらやひじき佃煮、田芋パイ、村内で栽培される安富祖米使用の無添加味噌等、25種類程のラインナップがあり、おんなの駅なかゆくい市場に納品するとリピーターが殺到するほどの人気ぶりだ。

恩納村や沖縄県の特産品コンテストで受賞歴のある商品も多数ある。農海産物の特徴を活かし、研究開発後に手作りで愛情込めて楽しみながら製造しており、万能たれやパッションフルードレッシング、オリジナル珈琲、惣菜や漬物、菓子等、恩納村の家庭の味を彷彿させるものばかりだ。

今や料理のレシピはアプリでいくらでも調べることができるが、長年世代間を受け継がれてきた調理法は村独自のものがあ

る。モズク天の衣には牛乳を入れるとか、相性の良い野菜の組み合わせ。カラリと揚げるための練り方は実際現場で習わないと素人では難しい。そして、7月に開催されるうんなまつりの目玉である“1000人牛汁鍋”。独自に冬瓜を加え、丹念込めて作った熟成味噌で味を調えたもので、購入者からも笑みがこぼれる。調理前からの下処理の大切さが沖縄料理には不可欠で、その奥深さを学ぶ場にもなっているという。



ボランティア活動を通して、1人1人感じてくれるものがあればいい



出店先では多くの人々が足を止めた

うんなまつりや産業まつり、ムーンビーチホテルでのやちむん市等に出店し、会員自ら来店者に商品の特徴を説明しながら直接販売を行っている。

やちむん市では、単価数百円の商品が3日間で50万円ほどの売り上げになる。ただの売り買いではなく、会のメンバーが素材や調理法についても丁寧に説明するため、イベント後に問合せの電話が鳴りやまないことも多い。

カテゴリー	子どもの健全育成／地産地消・食育		
住所	国頭郡恩納村字恩納419-3 恩納村婦人の家		
電話番号	098-966-1202	設立	1995年
		人数	37名
主な活動	地元特産物を活用した加工品開発や無添加味噌づくり、郷土料理研究。道の駅や地域イベントでの販売。村内学校の家庭科実習サポート。		
受賞歴	沖縄、ふるさと百選(生産部門、平成30年度)		

その他にも、村内小中学生の家庭科実習で沖縄そばの調理を手ほどきしたり、地域の加工場でのパート手伝い、また、東京のサンシャイン池袋で開催される物産展で天ぷらや沖縄そばの実演販売を行ったりと精力的に活動を行っている。



作り手の顔が見えることがおいしさの理由のひとつ

次の担い手に届くよう、自分たちができることは発信し続けること

40代～90代の会員が意気投合し、支え合って活動している有志団体ではあるが、今後の課題として「担い手不足」が浮き上がってくる。10年前は、会員の子も達も惣菜作りを手伝い、イベントの際には「いらっしやいませ、美味しいですよ」と声をあげ一緒に販売する姿もあったが、成長と共に村を離れて、そういった風景は見られなくなってしまった。多世代が時間に追われ、手軽なファーストフードやインスタント食品で食事を済ませるようになった現代。食に手間をかける人は減少しているかもしれな

いが、イベント会場で製造者が元気にPRし、無添加・手作りのものに触れてもらう機会を持ち続けることで「食の大切さを次の担い手となる子育て世代に気づいてもらえるのではないか」と期待を込めている。

また、役員は「イベントに限らず、住み慣れた地域で自分たちの活動を発信できる場をもっと作っていかねければ」との使命感も燃やしている。

沖縄の食文化を残し、地域を盛り上げていきたい

会員の中には、村内にある様々な団体(婦人団体協議会、更生保護女性会、商工会女性部等)を兼務し、役員レベルでその活動を牽引する方もいる。会長の大黒さんは、行政で地域づくりの生活支援コーディネーターをしており、前述した発信できる場作りの一環として、村内の名嘉真区と宇加地区での事例を紹介してくれた。

会員が農産物をおんなの駅なかゆくい市場に出荷している名嘉真区については、事業所や地域住民、特に農業を営む高齢者が中心となってここで獲れる野菜のブランド化を検討している。会員が率先して、オリジナルシールを貼った野菜販売など既に実験的にスタートしているが、うまく実現できれば1つの地場産業が興り、若い人が活躍できる場を作れると期待されている。

宇加地区に関しては、人権擁護委員として会員と共に地域貢

献を惜しまない区長が中心となり、平日8:30～17:00まで公民館を喫茶サロンや憩いの場として開放している。美味しいコーヒーと利用者がこぞって持ち寄った島バナナで情報交換にも花が咲き、マスターの区長と共に時には猫も出迎えてくれる。気軽に集える場があることで、相互の介護予防にも繋がっている。

「こうしたモデル的な地域を作っていくことで、村全体でも自分の地域をもっとよくしたい!何かできることはないか?という気づきになっていけばいい。」と大黒さんは語る。

沖縄が長寿の県として全国1位を誇っていたのは、もう10年以上も前のこと。現代社会の中で失われつつある食の大切さを次の世代へ残していきながら、地域を盛り上げていけるよう根気よく活動を続ける会の姿がそこにはあった。